



2010年3月1日

通巻1130号

発行：金沢大学教職員組合執行委員会  
〒920-1192 金沢市角間町  
TEL076-262-6009 角間内線2105  
E-MAL kanazawa@ku-union.org



## 金沢大学版 地球の歩き方

2002年2月から約半年を過ごしたプラハの街は、今まで一番好きな街である。

このときはカレル大学の客員教授として週三回の授業（日本語です。念のため）を担当する以外はなんの拘束もなかっ



カレル橋の石像

たから、毎日のようにコンサートやオペラに出かけた。ことに、家内が一月遅れでやって来るまでの間の、異国での心細い一人暮らしの期間を慰めてくれたのが音楽であった。クラシック音楽を趣味にしていてよかったですとつくづく思ったことである。

カレル橋やプラハ城などの観光地を歩いていると、あちこちの教会で開かれるコンサートのチラシが何枚も手にはいるが、それらはたいてい英語で書かれているので、最初のうちはそういう小さなコンサートによく出かけた。この種のミニコンサートで、私のお気に入りは、「ボヘミア・サクソホン・カルテット」というとても歯切れのいい演奏をするグループである。家内や友人を連れて数回聞きに行ったり、演奏会場で買ったCDはいまでも取り出して聞くことがある。

やがて、街に慣れてからは、国立劇場・国民劇場・スタボーフスケ劇場などで行なわれているオペラや、ルドルフィヌムにあるドボルザークホール、市民会館のスマタナホールなどでの本格的なオーケストラのコンサートにも行くようになった。住んでいたのは旧市街広場のすぐ脇のアパートだったので、どこの会場へも歩いていけるのがとてもよかった。金沢に



プラハの街を一望する



住んでいたアパートの入口



市民会館の前で



ミシャの画もある市民会館地下アールヌーボ



国立劇場オペラの開演前

帰ってきてから、夫婦どちらがいうともなく、それまでの郊外暮らしから町中のマンション暮らしに変えたのは、このときの快適さのせいである。

この種のオーケストラのコンサートでは、ドボルザークホールで聴いたベートーヴェンの3番が、楽曲の構造がよくわかる非常に分析的な演奏だったという意味でいまでも記憶に残っている。演奏はもちろんチェコ・フィル、指揮は若手の Manfred Honeck という人であったが、ベートーヴェンはこういう解釈でも充分に楽しく聴けるということを教えてくれた演奏である。また、有名な「プラハの春」コンサートのこの年のオープニングを担当したのは小林研一郎であったが、その指揮ぶりをオーケストラの真後ろの席（三月に学生から追加発売があることを教えてられてなんとか手に入れたチケットであった）から観ることができたのも得難い経験であった。しかし、チェコのオーケストラは結局チェコ・フィルがすべてであり、他はたいしたことがないというのもよくわかったので、帰ってすぐ、OEKの定期会員になった。このときの経験で日本のオーケストラのレベルの高さを実感できたことが大きな要因である。

しかし、プラハでは

じめての音楽的に開眼したのは、なんといってもオペラである。三つあるオペラハウスでモーツアルトの「ドン・ジョバンニ」（プラハがこのオペラの初演の街であることはクラシックファンなら先刻ご承知であろう）はもちろんのこと、「魔笛」も「フィガロの結婚」も、「コジ・ファン・トゥッテ」もそれぞれ数回観たし、「カルメン」も「椿姫」も「トスカ」も楽しんだ。オペラというのが、ソプラノやテナー歌手の美声に酔うことを主たる楽しみとする、案外に下世話な芸術だということを悟ったのはこの時である。しかも、いちばん高い席で日本円で5,000円はないのだから、何万円もする日本のオペラにはどうしても足が向かないのはやむをえないことであろう。また、「白鳥の湖」や「ロミオとジュリエット」などのバレエにも（こちらは言葉の問題がない分、より気楽に観ることができた）よく行ったが、最後の頃には、チェコ語で上演している「サウンド・オブ・ミュージック」や「マイ・フェア・レディ」などのミュージカルにも出かけた。こちらは、お客様も劇場もかなり庶民的で、この街の人たちがそれぞれのレベルで音楽を楽しんでいることがよくわかった。

その後も、プラハには何度か行ったが、なかなかこのときのようにゆっくりと滞在することができないのが残念である。いずれまた、今度はこの街で半年か一年、ゆっくりと過したいというのが、この先の私の数少ない夢である。



スメタナのお墓の前



ビシュフラッドから見たブルタバ（モルダウ）川

# 音楽の小窓



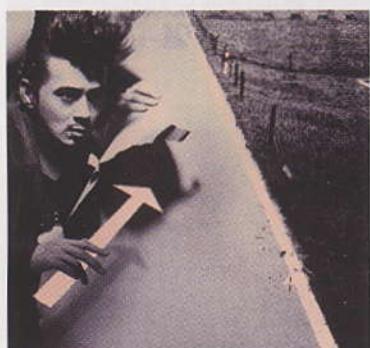
香港ポップス・「歌詩」の世界  
-達明一派・黄耀明と香港社会の変遷-(2)

国際学類・法学系 倉田 徹

香港ポップスを代表するバンドの一つである、劉以達と黃耀明の「達明一派」がデビューした1985年は、香港の1997年中国返還を決めた中英共同声明の調印の翌年にあたります。彼らの音楽のテーマの一つは、返還を迎える香港市民の心理の描写でした。北京とロンドンという巨大な力が頭越しに香港の運命を決めるなか、香港人はこのような手段で気持ちを表現するしかなかったのです。

しかし、香港がこれほどまでに恐れた返還は、実に呆気なくやつてきて、平穏に終わりました。返還から早12年、天安門事件が再演されるようなこともなく、自由と独自性を維持する現在の香港で、黃耀明の歌詞もそれを反映し、大きく変化しています。

最新アルバム「King of the Road」に収録された「廣深公路」は、香港に隣接する広州と深圳を結ぶ中国の国道からタイトルをとっています。ちなみに黃耀明はこのアルバムの中で、「107国道」との題で、この曲を標準中国語でも歌っています。中国国道107号線は他ならぬ廣深公路のことですが、歌詞も標準語で韻を踏むように、全く別のものが宛てられています。中国返還後の黃耀明のアルバムでは、代表曲を標準中国語でセルフカバーするスタイルが定着しています。香港の歌手が標準中国語で歌うようになったこと自体時代の変化を物語りますが、筆者としては新しいアルバムを手に入れるたびに、黃耀明の標準中国語の発音が少しずつ良くなってくるのを聞くのも楽しみです。

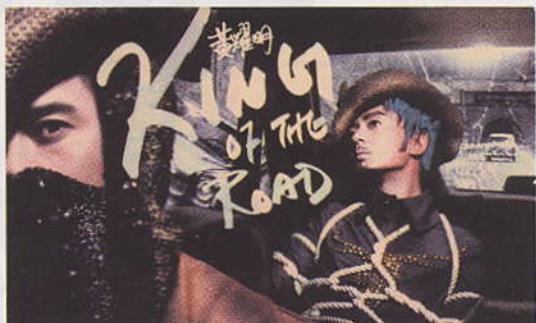


さて、「廣深公路」は勿論単なる地名ですが、「廣く深い道」とも読むことができ、なかなか寓意的であります。この曲の主人公はこの道を走るトラックの運転手、店の開業資金を貯めるというささやかな夢を抱いて、家族のために汗を流しています。恐らく彼は香港と大陸を行き来する「越境ドライバー」でしょう。返還後の香港の専らの話題である、大陸との経済融合の進展を物語ります。「千の荒野を越えてもまだたどり着かない、千の方向に走ってもまだたどり着かない、愛する者よ、時代は冷酷でも、走らねばならないのだ、あたかも前に道があるかのように。千里千里を越えてもまだ老いない、ただ会いたい君が老いない限り、君に向かって、まだ遠くても走れる、たくさんの得がたい物が得られるに違いない、走らねば。」就職や将来の不安に怯えてばかりいる今の学生たちに贈りたい曲です。

一方、同じくこのアルバムに収録された「你頭上的光環」は、逆にオジサン世代への賛歌です。中年男性の頭を光の冠と表現し、長年の努力の勲章として称えます。「あなたは血の汗を前途と交換し、青春を（株価）指數に捧げ、生え際はすでに悩みをすり減らし、運命とは何かを見通している。歳月は頭上の冠を光らせ、自然の美が輝きを放っている、浮き世は空騒ぎに過ぎないと見通し、神仙のように快活だ。」「礼を以て讃辞を捧げる—艶美は尽きても、美しさは限りないー」。薄毛というテーマを流行歌に盛り込むこと自体異色ですが、これを嫌みのない美しい歌詞に仕立て上げる林夕の作詞力にも舌を巻きます。

これらの歌詞からは、香港が返還の不安に怯え、国際政治に翻弄された時代を過ぎた今、立ち止まって過去を振り返ると同時に、特に中国の台頭という状況を前にして、中国の一部として生きるのか、或いは香港の独自性を維持するのか、進むべき前途を考える時期を迎えたことが窺い知れます。

黄耀明の次の曲はどのような歌詞になるのか、それは香港がこれから進む道によっても左右されることになりそうです。香港政治研究を専門としている筆者にとって、香港社会の観察を、香港音楽の歌「詩」の世界を通じて行うのも楽しい作業です。



ああすめの♪

# ちょいとれいは店

花も人も雪も能登

『夢一輪館』

四尾 敦子 学生部学務課共通教育



能登柳田村(現鳳珠郡能登町)で絶品の蕎麦が食べられる『夢一輪館』をご紹介します。

能登有料道路穴水インターで下り、能登空港方面に向かいます。空港を過ぎ、『桜峠』という道の駅まできたらもうひといき。左脇道に入る案内板を見逃さないよう気をつけてください。

通い始めてもう15年以上になります。一見、蕎麦道一筋といった風貌の店主ですが、実は役場の職員からの脱サラという経歴。地元への愛情深く、村起こしの熱意は出会った当時から変わりません。そんな店主の人柄もさることながら、通わずにいられないのは「挽きたて・打ちたて・茹でたて」の蕎麦の旨さに惹かれてやまないからです。

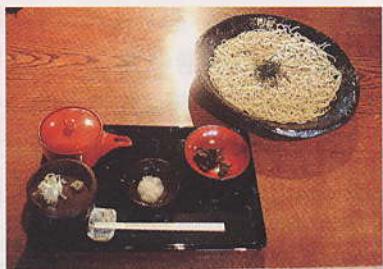
なんといっても冷たい板盛りがお薦め。まず、漆塗りの器にみずみずしく盛られた蕎麦に見とれてしまうことでしょう。蕎麦の実の中心部を使った白く繊細な麺は、思いの外コシがあります。ふくよかな香りを愉しみながら、嗜みしめて食べたい蕎麦です。つゆはきりっと引き締まったアゴ(飛び魚)だし。蕎麦を食べ終わり、大根おろしと山葵が馴染んだつゆに蕎麦湯を足して飲み干すのがまた旨い。

箸休めの豆腐の薰製をつまみながら、日本酒を舐めればもう至福のひとときです。食後は地元特産のブルーベリーを使った手作りアイスクリームをぜひどうぞ。蕎麦の余韻をこわさないあっさりした甘さです。

至福のひとときを過ごしに、そして能登の優しさに触れに、足を延ばしてみませんか。



きのこそば



板盛り



天椀そば

住 所：石川県鳳珠郡能登町當目28-1 能登空港から車で7分、道の駅桜峠のすぐ側

営業時間：11:00～夕方、夜は要予約 定 休 日：月曜日（祝日の場合は営業）

電 話：0768-76-1552

## ○○○編集後記○○○

受講生にカレル大学からの留学生がいます。勉強は積極的で、性格は明るく、原色が好きな、おしゃれでキュートな女の子です。彼女からプラハの庶民の生活、趣味などをいろいろ聞かされ、まだ一度も行ったことがない都市ですが、とても魅力のある都市だなあといつも思います。本号の「音楽の街プラハ」に描かれた優雅で上品なプラハに、私をさらに魅了しました。音楽を惜しみなく愛しているプラハの人々のその心持ちはなんと豊かなものでしょう。いつかそのようにコンサートやオペラに包まれる幸福な休日を過ごしてみたいです。また、いつか「花も人も雪も能登『夢一輪館』」の繊細でコシのある絶品そばを楽しみたいです。皆さんはどんな休日をお過ごしになりたいですか。

(編集者T)